

著者は1928年の生まれ。敗戦時に海軍機関学校の一年生だった人で、早稲田大学政治学研究所博士課程修了。長く早大で教鞭をとり名誉教授、昨年二月に他界している。『昭和政治思想研究』を代表作とする政治学者であるが、空海、江戸時代、科学等々と非常に幅広い文化論を発表してきた人である。その獨創性にもかかわらず、あまり知られてこなかったが、今後非常に有名になること確実であり、またそうなって欲しい人である。しかしこの短い書評においては、私との相違点を述べることにしたいと考える。

政治学者である以上マルクス研究が出てくるのは当然として、しかしドストエフスキーが、上位に並列されるのは、今日の日本に「ドストエフスキー的状况」が存在するからである。私もまたそれを感じてきたが、氏のそれとは少なからず異なる。たとえばライブドアを企業したホリエモンと、08年の二五歳の元派遣工員の秋葉原での無差別多数の殺傷事件の同列視には同意しない。自らを「神になりたい」と口走ったといわれる前者とは異なり、後者は自身が可哀そうな犠牲者ではないか。私はこの青年に「己はたった一人なのに、奴らはみんなしてグルになっている」という『地下室』の主人公の告白を想起し、それを丸浜江里子『原水爆禁止署名運動の誕生』（2011）の書評に書いた。

この国に閉塞感が充満していた。とくに若い人々には耐えがたいほどであって、2011・3・11の事件がそれを明るみに出した。河原書はこのフクシマ以前に執筆されていて、その反映は見られないのだが、ビキニ以降、原水禁世界大会の成立にいたる高揚を知っている私などには、若い世代の反原発の高揚には、それに先立つ鬱屈の存在を実感させるものがあった。第二次大戦から六十六年たつて日本は第二の敗戦を迎えたかのようなうだ。敗戦直後の茫然自失から出発した河原氏が、それまでの二〇冊を数える著書にけっして現れることのないマルクスとドストエフスキーの名を、大胆にも表題に掲げた論文の執筆に入ったのには、時代の転機の前感があつたためだろう。なにしろこの二人の一九世紀の西欧人は戦後の日本の若い世代を二つに引き裂いた存在だったからだ。

読み進むうちに、二人を並べて論ずるのに依拠している存在があつて、それがベルジャエフ（1874～1948）であることが分かる。ロシア革命当時モスクワ大教授だったがパリに移り活動した人で代表作に『ドストエフスキー』（1922）がある。そこではこの作家の作品の人物たちの二重性が問題にされている。それは善と悪、信仰と不信の相克であり、その極限がイワン・カラマゾフの自己分裂による発狂である、とされる。しかしマルクス主義者ペレヴェルゼフはこれよりも早く1912年の『ドストエフスキーの創造』（1989年に拙訳がある）において同様に二重性を取り上げつつ、それを社会的基礎において分析した。Dの人物の二重性は社会の小市民の特性であり、貴族・地主には、たとえばトルストイやツルゲーネフには無かったものであり、同様に貴族だったベルジャエフの二重性は

ペレヴェルゼフよりも後退したものだ。

二重性、その極限としての分裂は、ベルジャーエフがいうような抽象的な二つの自我の対立ではなく、上昇志向の我意と現状墨守の温順（従順）の相克である。初期作品の中心人物たちがそうであり、やがてDは『地下室』においてそれを意識と意志のそれと定式化した。またこれとは別に我意だけと、また温順だけの人物たちがいる。イワン・カラマゾフ、キリーロフ、ゾシマは三つのタイプのそれぞれの極限である。ロシア革命に反対していたBには第三のタイプが肯定されるのであり、二重性は第一と第二にのみ認めている。「存在が意識を決定する」とするマルクスに依拠し、その観点からPは分析していて、この方が正しい。

河原氏はマルクスを、金銭、すなわち貨幣の科学的な分析に立った革命家として評価する。そのマルクスに欠けていたものとして神の問題があり、それを「ドストエフスキーが補う」と言う。しかし自ら翻訳したことのあるバルザックに学んで、Dは金銭を問題にした文学をつくったのであり、作中の殺人は金銭がらみで起こっている。カラマゾフの父親は権力とはほど遠いが、帝政派の思想家であるBは「革命はつねに父殺しである」と言って、『カラマゾフの兄弟』の主題が革命であることを見破り、それゆえにイワンの自滅を描くDを称賛している。ナチス占領下のパリで生き、戦後に死んだベルジャーエフの大戦でのソ連の役割に対する評価を知りたいものである。彼はドイツの戦勝とソ連の消滅を願ったろうか？

私は『ドストエフスキーとは何か』でマルクスを援用せざるをえなかったが、それは『資本論』に現れている貨幣論がヨハネ黙示録の666の解説に依っており、同じこの黙示録が『白痴』以降で重要な場所を占めているからだった。貨幣の鑄造者は権力、つまり国家であり、その批判と否定は革命に通ずる。黙示録に現れているキリストと三大福音書のキリストとは別人のごとくであり、マルクスが重視したのは前者だった。ドストエフスキーは聖書の矛盾を二重人の造形に利用した小説家である。芸術家であって理論家ではなかった。

両者について、ユダヤ人問題を軸にその異同を探る試みがなされていて、有益である。いずれにせよ河原氏がマルクスを評価するのは、ソ連の崩壊にもかかわらず、資本主義の危機は存続していて、マルクスの予見が依然として有効性を失っていないからである。またドストエフスキーが評価されるのは、信じうるものが何もないという不信が世界的規模で広がっており、その説く神が有効と思われるからである。ただし両者に共通する欠陥として笑いの欠如を挙げている。ついにながら、レーニンは大声でよく笑う人だった

気がかりなのは、「ドストエフスキー的状况」のなかに、「これはもはや社会現象である」として、亀山郁夫の『カラマゾフの兄弟』新訳が引き起こしたミリオン・セラー現象があげられていることである。この長編小説のうち「大審問官」が特に重視されているので言うが、『恐ろしい利口な悪魔』と始まり、『Dixi（終わり）』とラテン語で終わる長大な大審問官の語りは、原文では段落がただ二つである。それは瀧が流れ落ちるにも似た淀みのない超大口舌である。そのことよって作者が表現しようとしているのは、それが、老人が長い年月をかけて自問自答してきた思想問題であることを表出するためである。ところが亀山新訳では実に七十一の段落に区切られている。老人はその都度一息つきながら語っているか

のようなのである。読みやすくなっているが、ただ読みやすいだけで、緊迫さは失なわれ、全体が弛緩している。誤訳、奇訳、はたまた珍訳についてはドストエフスキーの会の木下豊房のHPまた藤井一行の『翻訳の品格』に委ねるとして、この翻訳の態度は批判されねばならない。すでに故人である人に言っても詮無いことで、長文の解説のなかで、河原氏以上に亀山に肩入れしている弟子筋の編集者堀切和男氏に注意をうながしたい。

「信ずる時、信じていることを信じていない」云々はピョートル・ヴェルホヴェンスキーのスタヴローギン評であるが、これが本書のみならず、先行する著書にも頻出して、スタヴローギン人物像とされている。しかしこれはより多くヴェルホヴェンスキーが自身について語る言葉でもあり、ドストエフスキーによる定義とするには無理がある。芸術作品中の言葉は、「宗教はアヘンである」をマルクスの言葉として容認するように、作者の思想とみなすわけにはゆかない。作家が評論を書いた場合はその限りではないが。

同様なことは「無限の自由から出発して、私が到達したのは無限の専制主義でありました」というシガリョフの言葉（「自由に始まり専制に終わる」と要約している）についても言える。作中の語り手は「陰気くさい気むずかしげな顔つき」とこの人物を記しており、これをDの思想とすることは勿論のこと、これをもってDがナチズムやスターリニズムの出現を予言していたとすることは誤りである。もしも河原氏の言うがごとくであれば、『カラマーゾフ』において「もしキリストが現代に生きていたら、すぐに革命家の仲間にはいって、めざましく活動したに相違ありません」と述べる少年クラートキンの登場は金輪際無かつたであろう。Dの本音はここにあり、彼は「(すべての)専制は自由(への渴望)により打倒される」と考えていた。少年はレーニンの予見と読まれるべきなのである。

それではそのソ連がどうして崩壊(消滅)したかといえは、核武装と宇宙開発に金を使つたからである。もっと国民生活を慮っていたならば、今も存在していたはずである。

本書と同時に『秋の思想』が公刊されており、その序文にフクシマに触れた箇所があり、「まさに近代の欧米的文明は終わった」と述べられている。河原氏と同年生まれ、三か月前に亡くなった核エネルギー学者で、ヒロシマを踏まえ、ウランを斥けトリウム熔融塩炉サイクルを發明提唱してきた人がいる。如何なる場合にも放射能による汚染の無い原発であるのに、原発ムラ(体制)からは疎外されてきた。これにつき「原発は古川和男の遺言に従え」を執筆、近く雑誌に掲載されるが、これがこの問題に対する河原氏への私の見解表明ということになる。

(作家、ロシア文学者)